

ある夏の日の思い出

やけつく砂。きつい真夏の日差し。繰り返す波の音。そして、無気味なほど静まりかえった沈黙。私たちを取り巻く人々は、一言も語らず、彫像のように立ちつくしていた。その夏の一日が、私にとって生涯忘れることのできぬ、医師としての第一歩だった。

医学部を卒業し、私は内科・麻酔科研修と産婦人科専門医としての研修カリキュラムを選択し、同僚と酒をくみかわしながら、青臭い議論を日夜たたかわせていた。[治療医学] 中心の医学教育に対し、[予防医学] の必要性、患者のための医療を主張していた私は、しかし“医師免許があってもなにもできない医師”にすぎなかった。そんなある日のこと。

突然、日直室の電話が鳴った。消防署の救急隊から「海岸で病人が出たが、他の医師と連絡がとれないのでいっしょに来てほしい」との要請であった。

病人の状況を聞く余裕もないまま、救急車に乗り込んだ。日和山（ひよりやま）海岸までの車中で、海水浴客が溺れたための救命救急出動と聞かされ、サーッと血の気が引いた。まだ、救命処置のいろはも身につけていない未熟の医師である。そのとき考えたことは、もし生きていたらどうしようという、医師にあるまじき思いだった。

救急車はあっという間に浜辺に着いた。車から降りると、海辺には二重三重の人垣ができていた。“これはえらいことだ”と思いながら、人垣を分けて中に入った。すでに、日赤救護班の人たちが、人工呼吸、マッサージをしていて医師の到着を待っていた。視線が白衣を着た私に集まるのを感じた瞬間、心臓の鼓動が白衣を通して、透けて見えるのではないかと思うほど高まり、手に脂汗がにじんだ。

動揺した私の最初にとった行動は、往診カバンから血圧計を取り出し、患者の腕に巻く動作だった。患者に触れると、真夏の昼間なのに生臭い、異様な潮のにおいを感じて、初めて我に返った。血圧計を砂の上に投げ出して、慌てて脈（みやく）をとり、瞳孔を診た。脈は触れず、瞳散（どうさん）し、すでに溺死の状態にあった。「死亡しています」と言って、死亡確認の時刻を告げた。それを聞くと救護隊員たちは、“とっくにわかっていた”と言いたげに、処置を止め、引き上げた。車中でも無言のままだった。あの暑い夏の日の、ぶざまな自分の姿は、永遠の一瞬として、今なお私の心の中に深く突き刺さったままである。